審判研修会報告書

滋賀県バスケットボール協会

1．所属連盟・名前：　学生・クラブ連盟　　中川　寛樹

2．大会・研修会名：　第 52 回近畿地区国立大学体育大会・2014 年度近畿 YOC

3．日程および会場：　平成 26 年 8 月 11 日(月) ～ 12 日(火)

京都府立体育館（島津アリーナ京都）

4．講　　師　：　山崎仁士氏、岩木太郎氏、服部和明氏、鍋嶋幸富氏

志村伊織氏、小畑治氏、中澤久馬氏、細見竜太氏

5．研修会のテーマ：　初級者審判員の育成

6．内容（講義・討論・実技など項目別に、できるだけ詳細に）

講義　山崎氏

ⅰ）リード・オフィシャルが「右」に行くタイミング

ボールマンの 1 対 1 を見ているトレイル・オフィシャルは、加えてワンパスアウェイのレシーバー1 人までしか捉えられない。バスケットのある方向にレシーバーが 2 人いるときに、リード・オフィシャルが助けに行く。

その際、身体が常にコートの中心を向いているようにして、振り子のように動く。そうすることで、自身が責任を持つべきエリアの全体を見ることができる。

ⅱ）チームに信頼してもらえる審判であるために

大会では、知らないチーム同士が対戦し、知らない審判員がゲームを担当する。審判の身だしなみやコールの仕方に違和感があると、それがチームに不安を与えることになる。また、それが不信感につながる。

良い審判は、笛を吹かなくても抑止力として機能する。審判がゲームを管理することで選手にも緊張感が伝わり、より良いプレイを引き出すことができる。

実技 1　女子 1 回戦　奈良女子大学 - 和歌山大学

主審：中川　副審：大澤里沙氏（京）　主任：服部氏

プレイヤーはどの程度の触れ合いを起こせばファウルになるのかということを気に掛けており、審判がその基準を示してあげる。同様のからだの触れ合いをファウルとして取り上げつづけることで、ゲームをまとめられるようになる。

触れ合いの責任の所在を見極めてファウルの判定をするためには、その瞬間だけを見るのではなく、プレイを連続したものとして捉えられなければならない。

実技 2　男子 2 回戦　和歌山大学 - 大阪教育大学

主審：中川　副審：西浦友祐氏（奈）　主任：中澤氏

一つひとつのプレイに対し、過敏になってファウルを取り上げる必要はなく、触れ合いがプレイに及ぼす影響まで見極めて判定したい。

7．所感（刺激を受けたこと・滋賀県の審判に伝えたいことなど）

2 日間に渡り他府県の審判員の方々と活動させていただくことで大きな刺激となりました。自身の審判を見つめ直し、今後の課題を考えることができました。

この度の研修会に参加させていただき、本当にありがとうございました。研修会で得た経験を糧として精進して参りますので、今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。